キスから始まる関係

日向葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
キスから始まる関係

【Ｎコード】
Ｎ９７８１Ｉ

【作者名】
日向葵

【あらすじ】
クリスマスの夜、彼とキスをした。
そこから変わっていく二人の関係。
気付かなかった思いが交差する中、街には雪が降り積もる―。
※彼と彼女の視点から書いた不器用な恋の始まりのお話です。

二人の関係ーsideA ー

好きになるつもりじゃなかった。

Side A 館林 香澄

同じ職場の後輩で、たまたま飲み会で意気投合して
それからは仕事が終わって時間があえば一緒に飲んだり、遊んだり。
たまに、付き合ってるの？なんて囁かれることもあったけれど
もちろん一笑してやったわよ。

だって、ありえない。
アイツとは一緒にいて楽だけれど、
愛とか恋とか、そんな感情は抱いていない。
アイツはまだまだ遊びたい盛りの25歳。
5個年上の私なんて、おばちゃんだもん。
女として意識してないから、一緒にいてくれたんでしょう？

知ってるんだから。

アイツを気に入って近づいていった女の子のこと、
気持ちに気付かないようなフリして、笑顔で避けてる。
“好きな女の子には自分から行かないと嫌なんだよ”って
珍しく酔いながら、言ってたでしょう。

つまり、私は避けるほどでもない対象外。
たぶんアイツも私といて楽なんだと思う。
気を使わなくていいから。

私も恋愛ごっこなんてするつもりはない。
一緒にいて気持ちが楽なのは、こっちも一緒。
彼女なんてめんどうな位置よりも、友人っていうこの位置が結構居心地良くて
気に入っていた。

そんな関係だったはずなのに…。

会社の忘年会で、
悪酔いした先輩が、アイツと私に絡んできた。
「ね～。ほんとに柴田、館林さんと付き合ってないの？」
「付き合ってないですよ。」
しなだれかかる先輩の腕を押しよけるアイツの顔もお酒を飲んでいるせいか少し赤い。
それでも執拗に先輩はアイツをこづく。
「ほんと～？あやしいな～。」
「ほんとほんと。キスくらいしてもなんとも思わないくらいですよ。」

ちょっと言いすぎだよ！と眉をしかめて見せたが、酔っ払ったアイツはそんなこと気にもとめないようだ。

「言ったな～柴田。よし、そこまで言うならやってみせろよ～。」
「ちょ、ちょっと先輩！冗談じゃないですよ！」
慌てて、私が間に入る。
そんなの好きじゃなくても困るに決まってるじゃん！
ねぇ、柴田。

そう言おうとして、振り返ったあたしに、大きな影が覆いかぶさり唇にあたたかいものがほんのちょっと触れたかと思うと、すぐに離れていった。

思わず目をしばたいた。

何？

アイツはしてやったりのような顔でフッと笑った。

「ほ～ら、なんともない。」

そう、それはいつもの悪ふざけ。

だから、こっちもいつもみたいに、笑って、怒ったフリをすればいい。

「何すんのよ！」って、軽く流せばいい。

それで、万事うまくいくはずなのに。

うまく言葉が出なかった。

なんで、なんでこんなに心が痛いんだろ。

二人の関係ーｓｉｄｅ　Ａ　ー（後書き）

クリスマスのお話を書きたいな～と思って、ひょいと思いついたお話です。
久々の執筆ですが、宜しくお願いします。

二人の関係ーsideBー

Side B 柴田 渉

街はイルミネーション。
それもそのはず、今日は12月24日。
恋人たちのクリスマス。
浮かれた気分の街の中、僕は自分の両手を上着のポケットにつっこんで
あてもなく街をさまよった。
空気は冷たく、吐き出す息は白く闇に溶ける。
徐々に奪われていく体温を感じながら、僕はさっきの出来事を思い返していた。

お互い初めてなわけでもないだろうし、ちょっとしたおふざけのつもりで
軽く口付けた。
彼女とはいつも軽口を叩き合う仲だったし、
そんなこと位、笑いとばしてしまうような人だと思っていたから、
軽い気持ちでしてしまったんだけれど。

僕は戸惑っていた。
口付けた彼女の瞳に驚きと、そして。
悲しみの色が宿ったことに。

もともと僕は、女の人には割りともてる方だと思う。
昔から付き合う女の子は絶えなかったし、嫌いじゃなかったから。
だから、女の子が自分に向けてくる感情には割りと敏感だった。
時はそれが面倒くさくて、男女の関係に友情なんてありえないって

思っていたけれど、
館林さんと会ってその考えは払拭された。

彼女は一緒にいて本当に気が楽だった。
決して美人じゃないし、気が利くわけでもないけれど、
話をしてても面白いし、考え方も尊敬できた。
何より、いつも大人びていて、悪ふざけも冗談も一緒に楽しんでくれるけれど、
決して本気にはしないところが気にっていた。
僕に媚びることも、誘いをかけることも一切なかったから。
いつも異性といると一線を越えないようにと、勘違いさせないようにと、気ばっかり使っていたけれど、
彼女だけは違うって、そう思っていた。

そんな彼女に少し甘えすぎていたのかもしれない。

先ほど見せた表情が、頭にちらついて離れない。
まさか。
まさかね。

何かの間違いに違いないって、一生懸命自分に言い聞かせたけれど
一度沸き起こってしまった疑念は、簡単には消せない。

いや、もしかすると僕は知っていたのかもしれない。
知っていたくせに、知らない振りをし続けた。
僕はどうしたらいいんだろう。

二人の関係ーｓｉｄｅ　Ｂー（後書き）

久しぶりに書くので、なんだかドキドキしてます^^；

動き出す気持ち－ｓｉｄｅ　Ａ－

Ｓｉｄｅ　館林　香澄

初めてのキスだった。

「男女の恋愛なんて、簡単よ」
つい先日酔っ払った勢いで、アイツに恋愛について説教しちゃった
自分が思い出され、ひどく滑稽に思えた。

言ってなかったけれど、
生まれてから、男の人と付き合ったことなんてなかった。

そんなこと言ったらひかれそうで、
重い女だなんて思われたくなくて、
アイツにも言ってなかったし、言う必要も感じなかった。

でも私だって夢みてたんだ。
いつか好きな人とキスが出来ることを。
だから、キスが嫌で悲しかったんじゃない。

あのキスに、何にも意味がないことが分かったから、悲しかったんだ。

決して叶わない“思い”
それならば、ただ側にいたかっただけなのに、
女の子としてではなくても、友人でもいい。
一番気の合う友達として、ただ一緒にいたかった。
そう思っていたのに。

あのキスで気付いてしまった。

思わず飛び出してしまったことが少し後ろめたかったが、
仕方ない。
甘い痛みが胸をしめつけて、苦しいんだもの。

怒りも愛しさも悲しみも、全ていり混じった感情は涙とともに雪に
混じり
この街に降り注ぐ。

今日はクリスマス。
聖なる夜だ。

動き出す気持ち－ｓｉｄｅ　Ａ－（後書き）

そろそろ寒くなってきましたね。
クリスマスまでもう少し・・。

動き出す気持ち－side B－

Side 柴田 渉

何もかもどうすればいいのか分からなくなって、高橋に電話をかけた。

「俺、どうしたらいい？」

「じゃあ、聞くけど。お前は彼女のことどう思ってるの？」

「どうって…」

大切な人。

一緒にいたいと思う人。

そう言ったら、電話の向こうでため息が聞こえた。

「それって、“好き”ってことじゃないの？」

「だって、キスしてもドキドキしなかった。」

「渉。恋にもいろんな形がある。君もそろそろ気付くべきだよ」

明快な話だよ。

渉がどうしたいか。それが答え。

そうとだけ僕に告げて、電話は切れた。

僕はゆっくりと考えた。

僕がこれからどうしたいのか、何を望んでいるのか。

僕の中にある答え。

それは彼が言うように何度自問自答しても、ちっとも明快だとは思えなかったけれど。

ジャケットの上から自分の胸に手をあてて、空を見上げた。

彼女に会いたい。

今ならまだ間に合うだろうか？

僕の勇気がこの雪のように溶けてなくなる前に。

動き出す気持ち－ｓｉｄｅ　Ｂ－（後書き）

街のイルミネーションにほっと心が癒されます。
クリスマスイブまで後４日。

聖なる夜に－Ｓｉｄｅ　Ａ－

Ｓｉｄｅ　館林　香澄

時計は１２時。
そろそろ終電の時間。
しんしんと降る雪は一向にやまず、街のあたたかな明かりが薄く積もった雪に反射し
辺りを淡い色に染める。

特にあてもなく、ベンチに腰掛けて、
すっかり冷たくなった指先に暖かい息を吹きかけた。

手袋をもってくればよかった。
そうすれば、こんなに冷え切ってしまうこともなかっただろう。
そんなことを、街灯の明かりを見つめながら思っていると、
手の中にそっと暖かい缶コーヒーが渡された。

「風邪、ひくよ。」

じんわりとした暖かいぬくもりのおかげで、徐々に失った感覚がよみがえる。

「ありがと、でも私、ブラックは好きじゃないんだけれど。」

「知ってる。」

そっと顔をあげると、そこには困ったような顔で小さく微笑むアイツが立っていた。

「だから、買ってきたんだよ。」

柴田が買ってきてくれたコーヒーは、苦くて、でも暖かくて、
冷えた体を温めてくれた。
隣に座って私が飲み終わるのを見計らってから、彼は口を開いた。

「で、そろそろ聞いてもいい？」

もう聞いてるじゃん、と小さく嘆いたが、柴田は構わず質問を続けた。

「館林さんは僕のこと好きなの？」
「好きじゃないよ。」
「ほんとに？」
「たぶん。」
「じゃあ、なんで逃げたの？」

ちっと私は舌打ちをした。
どうやら逃がしてはくれない模様。
真剣な顔をした柴田を、覚悟を決めてぐいっと見上げた。

「怖かったから」

アイツが少し驚いた顔をする。

「柴田への気持ち、認めるのが怖かったから。」

聖なる夜に―Ｓｉｄｅ　Ａ―（後書き）

あと一話で完結します。

クリスマスイブまで後１日。

聖なる夜に－Ｓｉｄｅ　Ｂ－

Ｓｉｄｅ　柴田　渉

「認めたくなかった。気付かない振りしてた。
この関係で満足してたから、それで良かったの。」

彼女の予期しなかった素直な独白に、驚いてしまった。
まぬけな表情をしていたに違いない。
彼女の口元がへの字に曲がる。

「キスなんかするから悪いのよ。」

拗ねたような困ったようなその表情が、僕の心を揺さぶる。

「でも心配しないで。どうしようとかそういうのじゃないから。」

そういうと、彼女はそっと小さな声で付け足す。

「もうこのままじゃ、いられないかもしれないけれど。」
「いいよ。」

僕は咄嗟に口を挟まずにはいられなかった。
彼女の顔が驚きに歪む。

「このままじゃなくて、いいんだ。」

そうして、彼女の体を抱き寄せた。
冷え切った体に、お互いの体温が心地よく感じられる。

今はまだ何も約束できなくて、
そんな自分が申し訳ないんだけれど、それでもこの胸にひとつだけ
確かなことがある。

「会いたかった。」

僕の腕の中で、彼女が一瞬身じろぎをした。
どんな顔を館林さんがしているのか、非常に気になったけれど
今顔を見られるわけにはいかない。
僕の顔は、真っ赤になっているはずだから。

降りしきる雪もいつしか止み、行き交う人もまばらになる街の片隅で、
僕等はお互い抱き合ったまま、ぬくもりを分け合った。

今宵はクリスマス。恋人達の夜。

耳元でやっと告げた僕の答えに対し、小さな声で、うん、という彼女の頷きが聞こえたのは
当分僕だけのひみつだ。

－Ｔｈｅ　ｅｎｄ－

聖なる夜に－Ｓｉｄｅ　Ｂ－（後書き）

やっと終りました。
最後まで読んでいただき、有難うございます。

メリークリスマス！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9781i/

キスから始まる関係

2010年10月21日23時44分発行